小さな友達と歩む未来

浜松市内小学校
石野さん

私が散歩に出かけるたびに出会う小さな友達は、近所の田んぼに住む白サギです。引佐の広い夕焼け空は、ピンクから青むらさきへとゆっくり色を変えていきます。その空を白い羽がゆったりと羽ばたき、緑のいねの間からひょっこりと顔を出すすがたは、何度見ても心がほっとします。私にとっては散歩仲間のような存在で、そのすがたを見るのが毎日の楽しみです。

ところが、ある夏の日、ふと思いました。「そういえば、最近サギを見かける日が少ないな…」と。気になって調べてみると、静岡県のレッドデータブックという本に、一部のサギが絶めつきぐ種に指定されていると書かれていました。しっ地や田んぼが減っていることが原因の一つだそうです。私の町でも、自然の景色が少しずつ変わり、サギたちのくらしにえいきょうしているのかもしれません。

「このままでいいのかな」と思った私は、自分にできることを始めることにしました。愛鳥週間には、田んぼにキリッと立つサギの絵をかいたポスターを作りました。それから、浜名湖クリーン作戦にも参加しました。湖の岸には、波に打たれてくしゃくしゃになったビニール袋や、色あせたペットボトル、たばこのすいがらなどが落ちていました。たった一時間でごみ袋はいっぱいになり、持ち上げたときにうでが少しふるえるほど重くなっていました。「これだけのごみがなくなれば、水辺の生き物もきっとすごしやすくなるはずだ」と思いました。

作業を終えて帰ると中、田んぼの上を白サギがゆっくり羽ばたき、朝日に染まった空を横切っていきました。羽の先がほんのり金色に光り、そのかげが水面にやわらかくゆれて映っていました。その光景は、まるで「ありがとう」と言ってくれているように見えました。

自然を守ることは、サギたちだけのためではありません。水辺の生き物が減れば、川や湖の水がよごれやすくなり、農業や漁業にもえいきょうします。それは、私たちのくらしにもつながっているのです。環境のことは、遠い世界の話ではなく、私たちのすぐそばにあります。私は中学生になっても散歩を続け、川やサギの様子を写真や絵で記録していきます。そして、家族や地域の人たちに、自然の大切さを少しずつ伝えていきたいです。

今日も散歩のと中、白い羽を広げて飛び立つ小さな友達を見上げました。その羽は、赤からオレンジ、ピンク、むらさきへととけていく

夕空の中で、いちばんかがやいて見えました。むねのおくがじんわりと熱くなり、私はその光景を心にしっかりと刻みました。

「この町をきみたちがいつでも帰ってこられる場所にするね。ずっと、ずっと。」

変化しながら受け継ぐ

静岡市内中学校
西ヶ谷さん

「これが未来の服なのか。」

家族で訪れた大阪・関西万博で私は思わず呟きました。パビリオンには各国の歴史、文化、そしてこれから私たちが作っていく未来が紹介されていました。ＩＣチップを使った服が当たり前になったら、病気を未然に防ぐことや、自分で気づかない体調の変化もいち早く分かるかもしれない。表裏や前後をなくして衣服のバリアフリーが実現した服がこれからたくさん流通していくかもしれない。便利で快適、そしてスマートな暮らしに合わせてファッションも変化していくのかな。私はこれからの未来の生活を想像しました。

現在私たちの身の回りには、トレンドを取り入れた低価格の洋服を、迅速に大量生産し、短いサイクルで販売するブランドが多くあり、私たちは気軽にファッションを楽しむことができます。しかしそのスピードや価格の裏側には、労働問題や環境問題が隠れています。ファストファッションが引き起こす環境問題には、水とエネルギーの大量消費、水質汚染、処理しきれない廃棄物などが挙げられます。服を作るためにどれくらいの環境負荷がかかっているのかを調べたら、一着あたり二酸化炭素の排出量約二五・五キロ、水消費量約二三〇〇リットルであることを知りました。

トレンドはすぐに変化をしていくので、大量のエネルギーを使って作られた服も、すぐに捨てられてしまうことや、売られることなく廃棄されてしまうこともあります。服のライフサイクルが短くなることで、今度は廃棄するためにも環境負荷が生じます。日本国内でゴミに出される衣服は年間四七万トンで、一日あたりにすると大型トラック一二〇台分の服が焼却・埋め立てられているのです。

ファッションが引き起こす環境問題に私たちができることはないか考えていた時、とても面白い出来事がありました。

近所に住むお年寄りが私の家を訪ね、

「これ、あなたたち家族じゃないかしら。」

見せられたのは母が子どもだった頃の家族写真でした。今まで渡されることなくしまわれていたものが、家の整理で出てきて、届けてくれたのです。小さな母、今と全然違う大人の髪型やファッション、古めかしいベビーカー。写真を囲んで大笑いをしながら、

「あの時はみんなこんな髪型をしていたよね。これが最先端だった。」

と盛り上がる中、

「ちょっと待って。」

母がスマホから写真を探すと、私が二歳の時の写真が出てきました。そこには、今みんなで笑った古い写真で、母が着ていた子供服を、私が着て公園で遊んでいたのです。

なぜそのようなことが起こったかというと、それは、私の家の「おさがり」という習慣にあります。私の家では、古いものでも大切にとっておいて、受け継いで今も使ったり、着たりする習慣があります。私が使っているピアノは、祖母が子どもだった頃に買ってもらったもので、祖母だけでなく母が使い、お嫁入りと一緒にピアノも引っ越しをしたのです。

今私がとても楽しみにしているのは、祖母の家に大切にしまってある成人式の振袖を着ることです。そのことを美容師さんに話をしたら、振袖があることが幸せだということ。そして着物は自分らしく着ることで生まれ変わるということを教えてくれました。同じ着物でも髪型のアレンジの仕方、髪飾り、帯紐、帯の結び方を変えることで、伝統を受け継ぎながら、現代でも十分にその良さを活かすことができる。ということでした。私はどんな風に成人の日を迎えるのだろう。今はまだわからない楽しみがあります。そしてこの着物をいったいいつまで受け継ぐことができるのだろう。そう思うと、長い家族の歴史の中に私自身の存在もしっかりと刻まれていくように思いました。

私の家の「おさがり」の習慣はちょっと古く、そしてたくさんの思い出がつまっています。服を大切に長く着ることや、直して着る、付け加えて着ることで、衣服の寿命がのびます。また廃棄するものが減ったり、買い替えるペースが減ることで、環境への影響を軽減できます。家庭以外でも、自治体などによる服のリサイクルやリユースへの取り組みもあります。持続可能な社会に向けた古くても新しいライフスタイルなのかもしれません。

私はこの夏、万博に行って少し先の未来を見た気持ちになりました。そして未来はキラキラしていて、可能性で溢れていることを教えてもらいました。私が大人になるまでの間に、ファッションのトレンドは変化をし続けていくのだと思います。今までのものと、これからの自分を大切に、自分らしく繋いでいく、それが私の考える未来へのチェンジファッションです。

一人一人の行動

静岡市内小学校
稲葉さん

四年生のまとめ学習の時に、ＳＤＧｓについて勉強をしました。僕は十二番の「つくる責任、つかう責任」について調べて、食品ロスが地球温暖化などの環境問題と深く関わっているということを知りました。世界の異常気象の原因は、二酸化炭素などによる温室効果ガスです。廃棄したゴミ処理には温室効果ガスが発生し、それが地球温暖化による異常気象を引き起こします。

日本での食品ロスの量は、年間約四七二万トンで、その半分は家庭からのごみです。家庭のごみの多くは、食べ残しや賞味期限切れ、食べられるのに捨てられてしまう野菜の部分などです。僕の家でも、キャベツの芯や、大根やにんじんなどの皮をたくさん捨てていました。調べてみたら、家庭から出るごみの四割は生ごみで、一番多いのは野菜などの調理くずです。そして、日本のごみ処理は焼却処分が主に行われています。しかし、生ごみには多くの水分が含まれていて、生ごみを燃やすとその水分によって焼却炉内の温度が低くなり、焼却炉を傷める原因になると本に書いてありました。それを防ぐために、新たに化石燃料を入れたり、プラスチックを一緒に燃やしたりして、焼却炉内の温度を高温に保っているところもあるとも書かれていました。生ごみが増えてしまうと、燃やすための燃料が必要になり、その結果、多くの二酸化炭素を排出してしまいます。僕は、生ごみをたくさん家庭から出してしまうと、ごみ処理場も困ると思うし、温室効果ガスで地球も困ってしまうと思いました。地球が困ると、干ばつなどの異常気象を引き起こして、最終的には人間が作物が作れずに困ってしまいます。

僕は、食品ロスによるごみを減らす対策として、コンポストを作りました。コンポストとは、生ごみを土に混ぜることで、微生物が生ごみを分解して肥料ができます。コンポストを使うことによって、家から出る生ごみの量が減り、ごみ処理場での悪臭、害虫、火災の発生の問題を減らすことができたと評価されています。

学校のみんなにアンケートをとってコンポストについて聞いてみたら、コンポストを知らない人がほとんどでした。そこで僕は、コンポストの作り方を動画で撮ってみんなに見せました。作り方はとても簡単で、不織布の衣類収納ケースに土を入れて、そこにもらってきたぬかを入れて、水を入れて混ぜ、あとは野菜のくずを入れて、収納ケースを振ってさらに混ぜます。僕の動画を見た友達の中には、やってみ

たい！といってくれた人もいました。僕は今、約八ヶ月間コンポストを続けています。お母さんからは、ごみが減ったと喜んでもらっています。コンポストでできた肥料は花壇に撒き、元気の良い花が咲いてくれています。

コンポストを使うことで、家庭からの生ごみが減り、全体のごみの量も減り、結果的に温室効果ガスの排出量の削減につながります。僕たち一人一人の努力で地球環境を守ることができます。一緒にコンポストを作りませんか。

アカウミガメと私

御前崎市内小学校
服部さん

私の通う小学校では、四十五年以上前から、アカウミガメを飼育しています。

私は動物が大好きで、五年生になってウミガメのお世話ができるのをずっと楽しみにしていました。三年生のころには、ウミガメの本をたくさん読んで、自分で絵本を作りました。市のウミガメかんし員さんと、産卵の確認に行き、どうやって卵を保ごしているのかも見せてもらいました。海岸のゴミ拾いも、できる時に続けています。

五年生になり、六年生からカメ当番がバトンタッチされました。赤ちゃんは小さくてかわいくて、私が守るんだと思いました。そのカメたちを夏休み前に放流した時は胸がギューっと苦しくなりました。キケンだらけの海で、生きていけるだろうか。すぐに食べられちゃわないかな。自分でエサをとれるかな。

大人になって、御前崎に戻って来てね。ぜったい生きのびてね。アカウミガメにとって、大人になるまで生きのびることが、どれだけ大変か知っていたけれど、私は信じたくて、祈る気持ちで見送りました。

夏休み、長ぐつをはいてビーチクリーンに参加しました。アカウミガメのことも、もっと調べました。市の海外研修では、シンガポールでアカウミガメに関するクイズを出して、どんなことが問題で、私たちには何ができるのか、一緒に取り組んでほしいと発表してきました。そして、もっと色んな人に聞いてもらいたい。世界中のたくさんの人に知ってもらって、一緒に取り組めたらと思うようになりました。

大人のカメの一番の死因は、人間によるものです。人間の捨てた釣り糸などのゴミにからんで泳げなくなったり、エサとまちがえてプラスチックを食べてしまうことが大きな原因です。

アカウミガメは、卵のころの砂の温度で性別がきまります。地球温だん化がもっと進むと、メスばかりになって絶めつしたり、暑すぎて死んでしまうことも考えられます。

ふ化してすぐの赤ちゃんは、海に反射する月の光に向かって海を目指します。でも、自動販売機や車の光など、人工的な光のせいで、海にたどり着けず、そのまま死んでしまう赤ちゃんもいます。

二〇五〇年には、海の中は、生き物よりもプラスチックが多くなると言われています。ビーチクリーンをした次の日、同じ海に行くと、またちがうゴミが流れ着いています。プラスチックがほとんどです。今このしゅん間も、どんどんゴミは増え続けています。町で捨てたゴ

ミも、風に運ばれて海にたどりつきます。自分の家に、色んなゴミが次から次へと捨てられたら、絶対にみんなイヤなはずです。かぜをひいて熱がずっと続いたら、しんどくて、少しでも早く良くなってほしいのに、この地球はずっと、熱が出たままでいます。暑いから冷ぼうを使うと、もっと地球は熱くなってしまいます。だけど、暑すぎて使わない生活ができません。逆に、冷ぼうが効きすぎて、寒すぎるし設も多くて、モヤモヤしてしまいます。

アカウミガメを守るということは、自分たちのすむ地球を守るということにつながります。私の家族は、ふだんから、ペットボトルではなくマイボトル、ビニール袋ではなくショッピングバッグを持ち歩いたり、ビーチクリーンをしたり、行けるところは車ではなく自転車を使うようにしています。アメリカでは植林に参加しました。ゴミの分別もしています。服は、いとこや近所のお姉さんのお下がりもたくさん着ています。でも、それよりも地球の環境が悪くなる方が早いから、これ以上どうしたら良いのか教えてほしいです。そして、みんなの地球だから、世界中の人に一緒に考えて、一緒に取り組んでほしいです。

地球にも人間にもやさしく

富士宮市内小学校

深谷さん

私は、植物や動物等の自然の生き物が大好きで、小さい頃から栽培や飼育をして、生き物の形や仕組み、成長の様子を観察してきました。しかし、四年生の総合の授業で地球温暖化の学習をした際に、私たち人間の活動によって、地球の自然が危険にさらされていることを知りました。そして、（私たちのせいで、ひどい被害が起きているなんて…）と、とても衝撃を受け、恐くなってしまいました。それから、（地球を守らなければ！）と強く思うようになりました。その時から、私は自分で『地球を守るためのプロジェクト』を考え、一人でこつこつと活動を進めています。

始めは、節電、節水に努めました。使わない時は消す・止めるを心がけていたので、家族の皆も段々と意識が強くなり、定着していると思います。次に、給食で牛乳を飲む際には、ストローを使わずに飲むことにしました。私がそのように飲んでいると、

「たしかに！」

と言って、クラスでもストローを使わない子が増えました。それから、私が取り組み始めたことは、生ごみを減らすことです。生ごみの焼却によって出る二酸化炭素の排出が、地球温暖化を加速させているということを知ったからです。生ごみを減らすために私が取り組んだことは、生ごみを土壌微生物に分解してもらうということです。実際に母に協力してもらい、生ごみを捨てずに土に混ぜ、発酵させる実験もしました。すると、生ごみを分解した土はふかふかで、野菜を育てると発芽率や成長率、鮮度も高いことが分かったのです。地球の土壌が劣化しているという記事を読んだことがあったので、生ごみを分解した土が健康だと証明できれば、土壌の劣化も防げるかもしれないと思っています。しかも、そのような健康な土で栽培した野菜の栄養価が高ければ、人間の身体も健康になると思うのです。地球温暖化や土壌の劣化を防ぎ、人間の身体も健康にできる『地球にも人間にもやさしいプロジェクト』です。今私が抱いている野望は、様々な地域で生ごみを回収し、土壌生物に分解してもらった健康な土を地元の農家さんに分配し、農薬を使わずに元気な野菜を栽培してもらい、それを地元の人が食べ、また生ごみを回収する…という循環型システムです。このシステムを実現するために、私は今、土壌作りに欠かせないミミズを採集したり、どのような土だと生ごみを効率よく分解できるのかを研究したりしています。

私のこの活動は、孤独で地味なものかもしれません。しかし、失敗を恐れずに沢山挑戦していきたいです。私のこの取り組みが、学校の友達や地域の人々、まだ会ったことのない人達にも少しずつ広がり、『地球を守ろうとする人』が増えてくれたら嬉しいです。それが、明るい未来につながると信じています。

川根のせせらぎとお茶畑

焼津市内中学校
野中さん

夏休みになると、僕の家族はよく川根へキャンプをしに行きます。川の上流にテントを張ると、すぐそばで水の音が流れています。昼間、川に足を入れると驚くほど冷たく、手ですくうと光を受けてきらきらと輝きます。夜になると、川のせせらぎに重なるように虫の声が聞こえ、満天の星が頭上に広がります。その大自然の中にいると、「この川は生きているんだ」と感じます。

祖父母は牧之原でお茶農家をしていました。小さいころ祖父に連れられて茶畑を歩いたとき、祖父は「お茶は水が命なんだよ」と言っていました。そのときは深く考えませんでしたが、川根で冷たい川の水を体いっぱいに感じると、祖父の言葉がふっとよみがえってきます。大井川の水が茶畑を潤し、あの広大な牧之原のお茶を育ててきたのだと思うと、自然の恵みの大きさに気づかされます。

川根の水はとてもきれいですが、川原にごみが落ちているのを見かけたことがあります。ペットボトルやビニール袋が草の間に引っかかっていました。そのとき、もしこのごみで水が汚れてしまったらどうなるのだろう、と考えました。お茶も育たず、飲み水も使えなくなり、川の生き物たちも苦しむに違いありません。楽しそうに水遊びをしている子どもたちの姿を見ながら、この水を汚してはいけないと思いました。

僕はこの体験から三つのことを学びました。一つ目は、自然の恵みは当たり前ではないということです。お茶畑の緑も、キャンプで過ごした川根の景色も、すべては大井川の水があるからこそ守られているのです。二つ目は、水を大切にすることは小さな工夫から始められるということです。水を出しっぱなしにしない、ごみを捨てない、水筒を持ってペットボトルを減らす。そんな身近なことが水を守る一歩になると思いました。三つ目は、人と自然はつながっているということです。祖父母のお茶畑と川根の川、そして僕たちの生活は一本の流れでつながっていて、どちらかが欠ければ成り立ちません。

僕は川根で過ごした時間を思い出すと、ただ楽しかっただけではなく、いろいろなことを考えるきっかけになったと思います。川のせせらぎや茶畑の景色は、写真や映像では伝えきれない特別なものでした。冷たい水の感触や、夜に見上げた満天の星空は、今でも目を閉じればはっきり思い出せます。その体験があったからこそ、祖父の言葉の意味や、自然のありがたさを少しずつ理解できるようになったのだと思

います。川根で過ごした日々は、遊びながら自然に教えてもらった大切な授業のようでした。

これからの生活の中で、僕は水や自然をもっと大事にしていきたいです。たとえば、学校の水道で水を出しっぱなしにしないことや、外でごみを見つけたら拾うこと。本当に小さなことですが、そうした行動の積み重ねが自然を守る力になると思います。また「川根でこんな体験をしたよ」と話せば、きっと自然のことを考える人が少しずつ増えるはずです。自分ができることはまだ小さいけれど、やらなければ何も変わらないので、まずは自分から行動していきたいと思います。

そして僕は将来のことを考えると、自然を守る活動にも関わってみたいと思います。川や海の清掃活動に参加したり、環境について学んだりするのもよい経験になると思います。祖父母が大切にしてきた茶畑や、川根の自然は、僕にとってただの思い出ではなく、守っていきたい大切なものだからです。もし大井川の水がなくなってしまったら、牧之原のお茶畑もなくなり、僕の心の中にある「ふるさと」の景色も消えてしまうかもしれません。そう考えると、今のうちから自然と向き合うことの大切さを強く感じました。川根での体験は、これからの自分の生活を考えるきっかけになりました。

川根のせせらぎに耳を澄ますと、心が落ち着いて、なぜか安心できます。その音はただの水の音ではなく、自然からのメッセージのように思えます。「守ってね」「忘れないでね」そんな声が聞こえてくる気がしました。そして、なによりも川根で感じたことを伝えるために、この作文を書こうと思いました。川の冷たさや茶畑の緑、夜空の星の美しさは、言葉にしてもすべてを表すことはできません。それでも、少しでもみんなが「自然って大事なんだな」と思ってもらえたら嬉しいです。

「もったいない」を減らす取り組み

磐田市内中学校

青島さん

私は、家で「もったいない」とよく思っていた。

ある冬の日、夕食に大好物の鍋が出た。モリモリの野菜に、たっぷりのお肉。鍋料理のだいご味は、鍋いっぱいに具材が詰められている姿だと思う。しかし、家にいる家族は五人だけだ。大きな鍋の中身を、一度で食べきれるほどの人数ではない。以前は二人の姉がいたので、食べきることができていた。しかし、二人は一人暮らしを始め、県外に住んでいた。さて、どうしよう。冬になると、母は頻繁に鍋料理を作ってくれる。しかし、精一杯に食べても、大量の野菜を食べきれることはほとんど無く、いつも決まって、白菜が残されてしまっていた。残ったなら明日に取っておけば良いと思い、別のお皿に移していると、「白菜は取っておいても美味しく無くなってしまうだけだよ。」と、母に捨てることを勧められた。確かに、鍋は日持ちしない、とネット記事で読んだことがある。しかし、一人分以上残ってしまった白菜を捨てるのは、どうしても「もったいない」と感じて仕方が無かった。

この他にも、私の家では余り物が捨てられたり、取っておいても誰も食べず、結局捨ててしまうことが多かった。食べようと思って手にしたものの賞味期限が、数週間も前だったという事もあった。さすがに、もったいないという理由で、明らかに危険なものを食べたりはしない。しかし、賞味期限を確認しておけば、事前に防ぐことができたはずだ。そう感じた私は、青島家の「冷蔵庫の監督」になった。

私は「冷蔵庫の監督」になる前、母に「皆が食べきれる量を作ってほしい。」と頼んだことがあった。母は頑張って量の調整をしてくれたが、姉二人がいた頃の感覚が抜けず、つい多く作りすぎてしまうのだという。確かに、長年続けてきたさじ加減を改めるのは難しい。しかも、料理を作る側にとっては、「余る」ことよりも「足りなくなる」ことのほうが心配だと母は言った。そこで、私は「冷蔵庫の監督」になり、青島家の賞味期限切れによる食品ロスを減らそうとした。

私が「冷蔵庫の監督」として始めたことは、主に二つだ。一つ目は、賞味期限を逐一確認すること。私が経験してきた中で、特に賞味期限を忘れられてしまう食品は「納豆」だった。だから、私は納豆が冷蔵庫に追加されたときは必ず表示を確認する。そして、賞味期限が数日後に迫ると、自分が食べたり、「食べてください」と書いたテープを貼り、家族に呼びかけたりすることで生ゴミ行きを防いだ。

二つ目は、冷蔵庫の中身を整理すること。もともと私は整理整頓が好きだったから、食品ロスを意識する前から冷蔵庫の棚の整理をこまめに行っていた。食品ロスを意識し始めてからは、ただきれいに並べるだけではなく、早めに食べた方が良いものや、賞味期限が近いものを最前列に並べるようにした。そうすると、

「あ、これ賞味期限切れてる！」

となってしまうことが減り、買ってきたものを期限内に食べることができるようになった。

私の監督としての行動以外に、青島家では「ローリングストック」を行っている。非常食や缶詰は日持ちするから、つい油断してしまう。しかし、防災用に買った沢山の缶詰の消費期限が、いつの間にか過ぎていた、ということもある。その対策として、「ローリングストック」をすると、常に一定の食料を備蓄しておくことで災害に備えたり、賞味期限以内に消費することができる。

食品の管理をしっかりとすれば、家庭で発生する食品ロスは、大幅に削減できると思う。実際に、私の家では賞味期限を管理するようになってから、期限切れの納豆は無くなり、私が「もったいない」と感じることも減った。「賞味期限」ならば、多少過ぎても問題は無い。しかし、やはり食べ物は美味しい状態で食べるのが一番だ。しかも、賞味期限や消費期限を気にすることは、食品ロス対策にも繋がる。そのため、私はもっと多くの人に賞味期限の表示を気にしてもらいたい。そして私は、「もったいない」を減らす取り組みを、これからも家族と続けていきたい。青島家の「冷蔵庫の監督」として。

もう一度会いたい

裾野市内中学校
八木さん

私の父は鳥が好きだ。中でも特に猛禽類を好む。猛禽類とは、狩りをするために視力や脚力が発達し、口ばしや爪は強く、鋭く成長する鳥のことを言う。大きくは鷹とフクロウの仲間に二分されるが、私と父が観察をするのは前者の仲間である。

私と父は、よくそのような猛禽類を探しに出かける。私たちが猛禽類を観察する主なスポットは、家から車で三十分ほどの場所にある田畑の広がる野原だ。田んぼや畑の脇には透き通った水が絶え間なく流れていて、春には赤紫色のレンゲの花が咲き、秋には小道に黄色いイチョウの葉のカーペットが敷かれる、とてもきれいな所だ。川や畑の周囲にはたいていカモやハト、ネズミなどが生息している。だから、それらを捕食する猛禽類も見られるというわけだ。日本に生息する猛禽類の多くは毎冬、同じ場所に飛来する渡り鳥でもあるため、決まってこの場所に行くのが私たち親子の冬の楽しみだった。

だが、私たちが数年間通ううちに、見られなくなった猛禽類がいる。オオタカだ。通い始めたころには獲物を食べたり、小道を横切る姿が見られたが、昨年は影すら見えなかった。オオタカは父の大好きな鳥であり、野原の王者と言える存在でもあったため、彼らを見られなくなったのは本当に残念だった。

オオタカが飛来しなくなった理由について私が考えた仮説を述べたい。一つ目は、気候変動による影響、特に地球温暖化だ。この影響はオオタカが飛来していた野原でも着実に見られる。最寄りの気象観測所における年平均気温が、ここ九十年間で二度も上昇しているのだ。また、ヨシキリ、イワツバメ、アマサギなどの夏鳥の飛来時期がここ数年間で一ヶ月ほど早まっている。温暖化は、間違いなく渡り鳥の飛来行動に影響を与えていることがわかる。

二つ目は、人間の活動によるストレスだ。オオタカをよく見かけた並木道で、ある年、水道管の工事が数年間行われた。同じ野原では、毎年イワツバメの群れの飛来も確認でき、トンネルの中で子育てをしていたのだが、そのトンネルの工事が行われてからは、確認できるイワツバメの個体数が減ったり、全く見られない年もあった。同様のことがオオタカにも起こっている可能性は十分に考えられる。

全ては私の仮説でしかなく、オオタカの飛来が見られなくなった本当の理由はわからない。しかし、人間の存在や生活が彼らに何らかの影響を及ぼしているのは確かだと思う。一度飛来をやめてしまったオ

オタカをまたここに呼び戻せるかどうかもわからない。でももし戻ってくれたなら、オオタカが生活を始める際に、人間ができることを考えてみた。

まず、オオタカが好む十メートル以上の高木を残す。オオタカが捕食する小動物、ネズミや小鳥から間接的に農薬を摂取することを避けるため、接近する農地では無農薬か低量の農薬使用に努める。人通りの少ない場所であれば、繁殖期は交通規制などができれば安心してヒナを育てられるだろう。また、小さな努力としては、道を歩く一人ひとりが必要以上に草木を踏み荒らして小動物の繁殖を妨げないようにする。観察は遠くからそっと行うことを心掛けたい。少しずつでも、できることは何でもやろう。だから私は、せめてこれから、毎年野原の様子を記録しようと決めた。具体的には、草木の高さ、量、川の水量、月毎の平均気温などの野原の環境の記録だ。これらの記録と、猛禽類の飛来時期を照合することで、野原周辺の環境が彼らにどのような影響を与えているのかを、明確にすることができるだろう。

最後に、父だけでなく、私自身がオオタカの飛来を切望する理由について述べておきたい。彼らオオタカは、あの野原に飛来しなくなったとしても、私が気にしてもしなくてもそんなことに関わりなく、もっと暮らしやすい別の野原を見つけているかもしれない。しかし、もしオオタカ以外の猛禽類の飛来まで途絶えてしまったらどうなるだろう。彼らが捕食するはずの小動物は増殖し、農作物を荒らす。そうなれば、自治体は害鳥、害獣に指定し、駆除されてしまうかもしれない。人間の生活によってオオタカが消え、次にはカモやネズミが消える野原を想像すると、とても寂しくて悲しい。観て楽しいだけではない。オオタカの存在自体が人間にもメリットがあるのだ。猛禽類が人間に協力する意思がないとしても、共存のために人間が考え、お互いの存在が需要と供給のサイクルを満たすようにしていかなくてはいけない。私たちがほんの少し、オオタカの生活のために配慮するだけできっとこの願いは叶うはずだ。

あの野原で、私は、もう一度オオタカに会いたい。